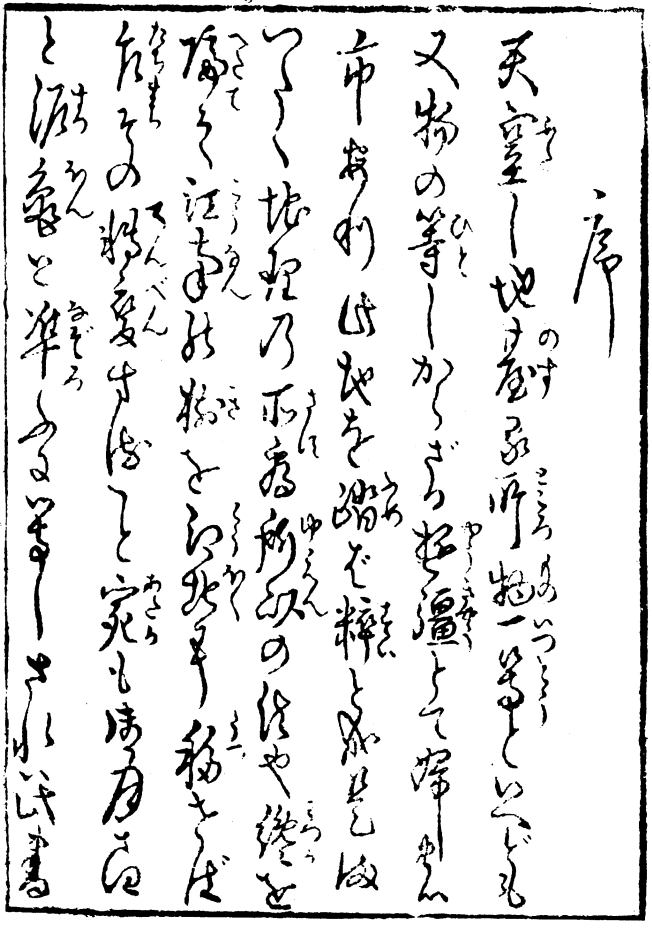
聖遊廓

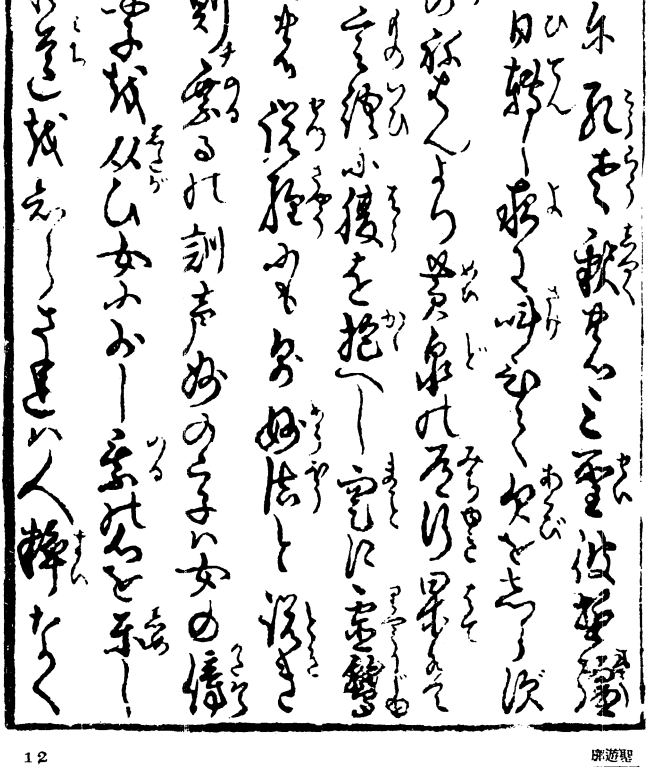
分六寸三	コヨ	紙表
分一寸五	テタ	
寸 三	コヨ	枠文本
分二寸四	テタ	

序

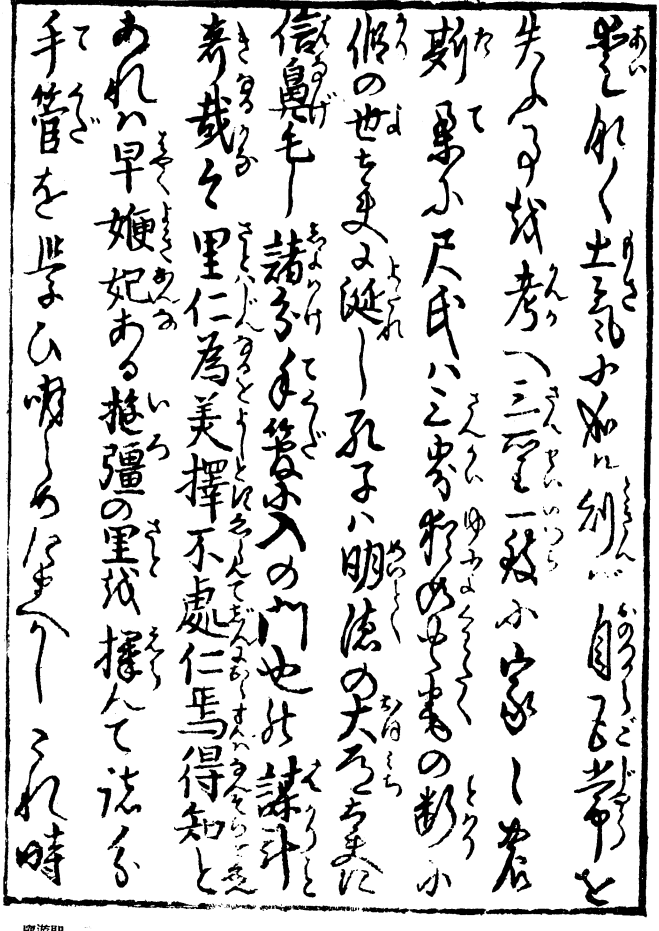
天窒し地臺る所。物一等といへども。又物の等しからざる遊彊とて。婦の市あり。此地を踏ば粹と成。是まつたく地理の所爲所以の法也。纔を隔て江南の樹を江北に移せば。乍その轉變すると。宛も御月さまと泥鰌と準ふに等し。されは此書を覽に孔老釋の三聖彼



遊彊に遊ひ。日轉し夜に叫ひて欠をしらず。二人枕のねはんより黄泉の道行果は漢土の言語に腹を抱へし。寔に靈鷲山一代の説經にも則妙法と説き。法とは則チ乗るの訓。声妙の字は女の傍に少の字を从ひ。女に少し乗の心を示し。後世此道をしらされは。人粋なく愛なく。土

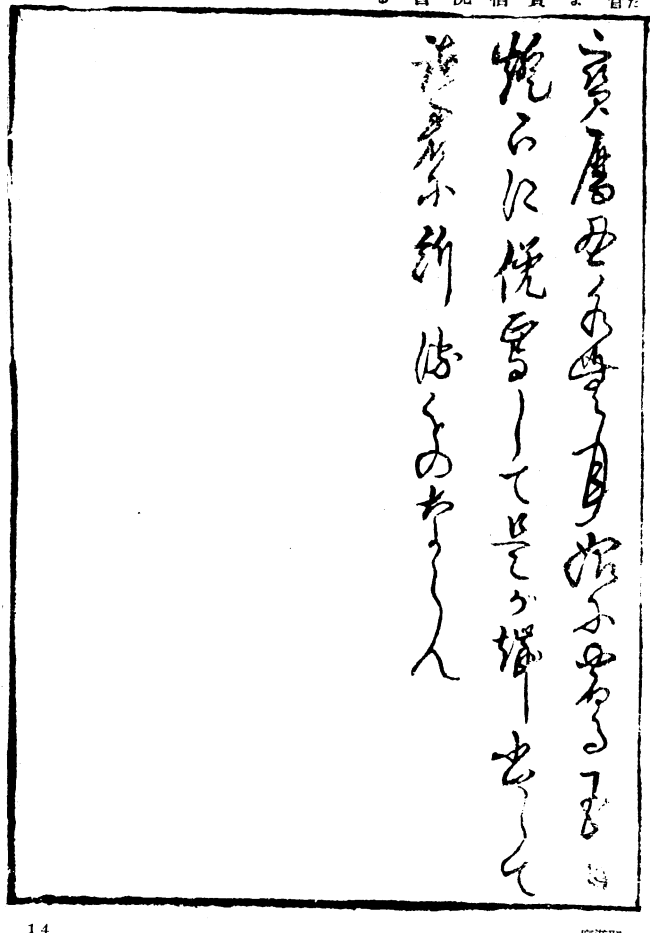


氣に成ル則ば自五常を失ふ事を考へ。三聖一致に家この期果に。尺氏は三界猶如火宅の斷に。假の世太夫に涎し。孔子は明德の大道太夫に信鼻毛し。諸分手管に入の門也の謀計奇哉々。里仁爲美。擇不處仁焉得知と



知とあれは。早嬾妃ある遊彊の里を

擇んて。諸分手管を學ひ明らめたまへかし。これ時寶曆丑水無月娘に宿る五日。燈下に俛焉して是が端し書して。諸君に訴るものならん。



揚屋亭主 李白 女房 瀧	中居なつ
孔子大盡 合方 大道太夫	老子大盡 合方 大空太夫
釋迦大盡 合方 假世太夫	右之外客名寄セ
客 五柳先生陶淵明 合方女郎 菊	費長房 合方女郎 鶴
周茂叔 女郎 蓮	東波 合方鄭堂子 李節推
韓退子 影子 孟東野	客 文殊
客 目連	同 賓頭盧
同 阿難	たいこもち 白樂天
たいこもち 鉄拐仙人	其外略之
書置の事	同辭世
尺八の世 道行	風流酒花
くるは唐韻	目錄終

聖遊廓

緡蠻たる黄鳥丘隅に止る。とゞまるところに止まらざれば。鳥にだもしかし。といふ四角な文字の廉取て。鳥は木に住む。魚は水にすむ。人は情の下にすむと。臼つき歌にうたはすは。これも和國の道ならめ。郭の哥は客の浮氣をたねとして。万のはうたとぞなれり。長歌。短哥。せんどう。馬かた。たけき惡者の心をやわらぐるも。ゆかりのつきの一ふしぞかし。されば一こそ。銀猫は抛ども。江口の君のなげぶしには。腰をぬかせした。しもあり。爰に聖人のかよひたまへる郭あり。揚屋の亭主は。李白とかや。中にも孔子はくるわにて。すいといはれて端手ならず。ゑちご縮のかたびらに。もんろの羽織すそながく。深あみかさにあわざうり。古金買の目利にも。太夫かいとは見へざりし。李白がかたへ御入りあれは。

▲亭主李白　是は仁さま。おめつらしい。サア〳〵奥へ。ともてはやす。▲孔子ナント李ス。此中は久しいの。無事て珍重〳〵。と座敷へ行。▲李白女房瀧　是はおめつらしいおかほ。おうはさばつかり申ておりました。▲中居なつもし仁さま。此中横堀でお見うけ申ましたゆへ。大かたお寄なさるであろふとぞんじましたに。よふまたせなさつたの。▲孔子　ヲ、よりたかつたけれども。行時に徑によらず。そちをちらりと見たゆへ。太夫にことづてしたかつたけれと。十目所視十手所指。其時馬喰町の方へ人かはしつたが。何事じやとおもふたれども。君子は危にちかずかずと。すぐにもどつたが。なんであつたや。▲仲居なつ　そのときは馬やが。ちとやけましたげな。▲孔子曰人は怪我はせなんだか。といふて馬をとはず。▲中居　イヱ〳〵けがはござりませなんだ。▲孔子　ヲ、それは可也〳〵。久しうこぬうち。ざしきがきれいになつた。富は屋を潤ん。どふでも李白。出來たの〳〵。▲亭主李白　おまへさまがたの御贔屓ゆへ。だん〳〵仕合つかまつりましてよろこびます。▲孔子　ヲ、よいことじや。シタガ瀧。親父にすいぶん酒をとめたがよひぞや。酒ははかりなけれども。乱に及ざず。すぎぬやうにしたがよい。▲李白　イヤモ朝からばんまで。さけのたゆるまがござりませぬ。▲孔子　イヤサ座敷はつとめにやならねども。終日百盃すれど

も三盃に過ぎずで。心でひかへるがよいぞや。▲亭主　どふでなる口でございますれば。一盃／＼又一盃。とふでも過ます。▲孔子　ィャそれが座しきばかりではない。内證でもたきが顔を見てはのみ。瀧を見てはのむゆへ。瀧見の李白といふて。よふ繪に書ぞや。▲ていしゅ　ハテわるじやれなと笑ひのさいちう。うら口から。ひろそでのゆかたに丸ぐけの帶。じたらくに前にはさんでくるを見れば。老子なり。▲瀧是は老子さま。うら口からおこしはおめづらしい。仁さまもお待なされてゞござります。▲老子　ャァおやぢはさきへ來たか。といふを聞て。▲孔子　玄子。これへ／＼。なんとしてうら口から御いでぞ。▲老子　ィャ藏の間の切戸があいてあつたゆへ。是はさいわいの道があると。裏から仕かけたれば。こゝの久助めが。くらがりから牛の出たやうな。とおれをうしにしをつた。人我を牛といふ時は。我にうしの性ある事を知ると。腹をたてぬそ一德なり。かゝる所へ。釋迦はかりの世といふ太夫と相合駕籠にて。だいどころまでかきこませ。▲李白見るより。コレハ釋迦大盡の御來迎。太夫さまとのあいごし。コリャムマイありがたい。まづ／＼是へ。とかごのたれあぐれば。しやかは紋紗のかたびら袷にりんぼうの紋所。金襴の帶に異香くゆらせ立出給ひ。ナント李白まめなの▲主　ァィおまへさまにもおかはりなく。いつとても御二人つれ。比翼の中。とそやすれば。▲尺迦ハテ何をいやるぞひの。今此やうにつれ立ても。會者常離臨命終時不隨者ぞいの。▲太夫かりの世　あれ李白さん。聞て下んせ。あのやうに無常な事ばつかり。ふてゞござんすわいな。▲亭主ハテわけもない。仁さまも。玄さまもおまちかね。サァ／＼おくへ。とともなひゆく。▲孔子老子一時に。尺迦すゝ。是へ。とあいさつあれば。▲尺迦　コレハ御兩所。おまちかね。瀧ナント久しひの。▲たき　ホンニけふはマァおそろひなされて。よふおこし遊ばしました。孔子さま。大道さまをかりましにあげました。老子さま。大空さまを見せましに人遣はしました。といふ内に。▲大みち太夫來る。尺迦す。老子す。御出遊はしませ。孔子す。けふはよふ御越なされた。李白瀧へも。それ／＼のあいさつは。さすが孔子のあひかたとは。かたくろしいでしられけり。かゝる所へ。大空は座敷へ來り。何のあいさつもなく。老子す。けふはこち風が吹たそふな。といへば。▲老子　けふは少し南風がふきつけた。▲太夫　ホンニどふでそんな事でござんしよ。おまへの所に。さかつきがあるそふな。

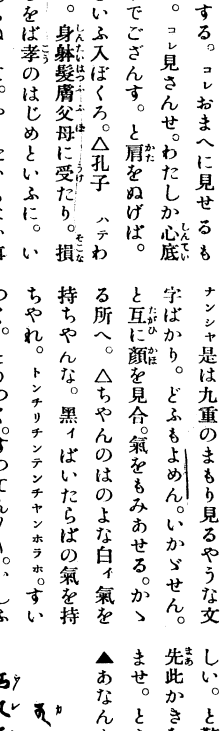
ちとまはしなんせんか。▲老子　ィヤけふもまはしはせずにきた。▲太夫　ェ、わるざれな人さんじや。と詠もなきあいさつは。老子の好ふうならん。▲主李白は。鯉のさしみを。　そう〳〵けふはあなた方のおいりとうけ給り。琴高が方から鯉をさし上たいと申て。私か方へ持せてこしました。と小皿に入て前におく。　是は琴高が志過分〳〵。としやうくわんあれば。▲主李白　折ふし此方に酢をきらしましたゆへ。となりへ貰いにやりましたが。酢がきゝますればよふござりますか。▲孔子　やはり鯉はこくせうがよいに。此酢はきぶひ酢じや。▲しやかは。コレハ甘たるい。▲老子はにがいかほして居たまへば。▲李白は氣のどくがり。是はふかげんにござりますか。▲孔子曰　ィヤ〳〵酢はすいが酢のあじしや。釋迦のあまいといわるゝは方便也。苦ィトあるは老子のすねなり。心こゝにあらざれば。喰へどもその味をしらず。酢はすいにきはまつたものじや。くるはですいもあまいも知つたものを。すいといふは。此時よりぞはじまりけり。▲老子　けふは莊子が來るはづじやが。ナセおそひぞ。▲大道　莊子さんはおまへのおつれかゑ。ホンニお氣質がよふ似なさつた。なんじややら。ゆめに蝶になつてくるわへ來たとやら。よふ寓言らしい事をいふおかたでござんす。▲仲居文出て。勝手へ白樂天どのか來ていられますか。酒のお相手にざしきへおよびなされぬか。といへば。是はさいわい。樂天が國太夫ふし久しうきかぬ。これい〳〵。といふよりも。白樂ざしきへ出。何もさま久しうおめにかゝりませぬ。御きけんよふござります。▲皆〻　久しう見へなんだが。どふじや。▲樂天さればでござります。私も一生のおもひでに。嶋原へいてのんで見たいとぞんじまして。此中夜舟で牧方あたりまでてかけましたれば。なにが夜のほの〳〵明に。八幡山に雲のかゝりし氣色。そのおもしろさ。白雲帶に似て山の腰をめぐると口ずさんで。一盃のみかけましたれば。いづくともなく。白髮老人壹人小舟に乘て。わたくしが舟を目がけこぎ付。牛蒡くらへ。酒くらはぬかと申ましたが。中〻叶ふものではござりませぬ。伏見までいかぬうちに。けん酒にまけて。道から逃て歸りました。其酒にあてられて。此中はねておりました。▲太夫大道　そんならばむかい酒に一ッよかろとさす。▲樂天　おさかづきはいたゞきますが。御酒は今のじやおゆるし〳〵。したが此間めづらしいはなしを。乘合で聞てまいりました。費長房は御そんじでござりますか。といへば。▲客　それは鶴とねんごろしていた費長房か。といへば。ナルホド

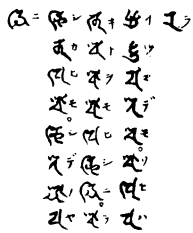
その鶴を連て。かけおちせられましたが。京のすゞみて長崎壺わりといふ菓子を仕出し。唐人姿で。ほり〳〵歯もろふてあまいと。凉中うられましたげにござります。▲仲居文　そふであろふとおもふたてや。どの繪本を見ても鶴に乘て飛あるいて。たいていいやらしいお方ではなかつた▲孔子ノ曰。幾ばくの人。爰におゐて平生を誤と。朱子が胡丹安をしかりしも無理でない。周茂叔は蓮をうけ出したといふが。ほんかや。▲樂天　イェ〳〵茂叔さまは蓮を愛してはござれとも。遠く見るべし。馴て翫ぶべからずとやらいふてござつて。中〻手いけにして見る御心はないそふにござります。柳子は御ぞんじなさつてござるか。といへば。▲孔子曰　柳とは陶淵明が事か。▲樂天　ァィ五柳さまの事でござります。あなたは菊にきつい打こみで。此中も絃もない琴を彈眞似して。さわいでござりました。▲太夫大そら　樂天す。此中身なけ心中が有たといふが。じやうかへ。▲樂天　イェ〳〵心中ではござりませぬ。美生といふ男が。近所の娘と溉流ノ橋にて出合約束いたしまして。橋のうへで待てゐました所に。なにが此中の大白雨で。にわか水が出て來たに。爰をさつては心中が立ぬといふて。やつぱり橋のうへにいたげにござります。其うちに上のつゝみが切れて。水が一時にすさましふ出て。はしが落てながれてしんたげにござります。それを娘が聞て。そのやうなおろかな男なら。あはひで。よかつたといふていますげな。▲太夫大道　義によつて命をはたすは。人たるものゝ道なり。美生もやくそくを變せずして。義のためにいのちをうしなひしは。かわひらしい心じやナァ。▲太夫かりの世　ソウトモそれはみな前世からの。やくそく事。過去ノ業因でござんす。ノゥ大そらす。▲大空ナンノイナァ。その美生とやらが。せまいさゝの葉のよな心から。その女子壺人におもひつめるといふかちがひ。其ばんにやくそくがちがふて。いやといふなら。廣いせかいに。たくさんな女子。どれなりと合點する女を。女房にしたがよいわいな。三人の評判は。孔子。老子。尺迦。三聖の氣うつりとしられけり。

▲樂天　其美生が河流を風流求女塚と。いふ狂言に。女伊達を取組。明日から角の芝居ていたします。▲くろ舟には誰かなるそ。▲忠右衛門＝は。竹林の阮藉でござるげな。阮藉が青ィ眼。海老藏が目よりすさましいと申す評判。蝦蟆仙人の非人かたき打。きついあたりでござります。東婆さまは李節推といふ若衆方にきつい打込で。花みちから李節推が馬＝乘て出られましたれば。

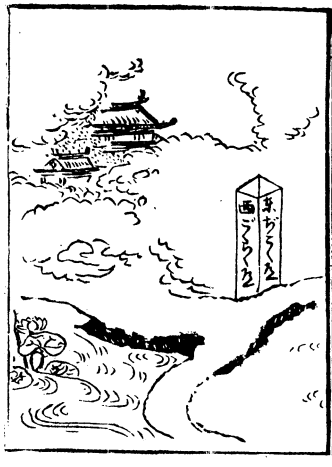
馬に乗少人勝美なりといふ譬とばは。東坡さまでござつたげな。馬をつないで。岸に花落るを知るといふ詩を。其時つくりて遣はされしとて。それをやはらげて。駒がいさめは花がちるといふ小哥が。只今大分はやります。韓退子様は孟東野といふ影子にきつい打込で。韓雲孟龍のちかひといふ事がありると申て。御名が立ます。▲釋迦聞たまひ。漢の裏帝が御衣のたもとを斷しも。男色の心中なり。此道はふかいものそふな老子すこそ。うらみちを好れそうなものじや。と笑ひになりぬ。▲太夫大空　コレ樂天す。南にめつらしい大こ衆が出るといふが。付合なんしたか。といへは。▲樂天　申。それは誰が事じやな。▲大空　イヱ名はきかぬが。口からいろ〳〵のかげ繪をふき出すげな。▲樂天　ェゝそれは鉄拐が事でございましよ。といへば▲瀧聞て。是。なるほどそれは。此中此方のお客が手まへゑ。つれて見へてゞござりました。其時花の高尾と傳七とを。吹てゝござりました。それは〳〵おもしろい事いな。▲大空は。　なんとそれは。しやほんでしたら。なりそふなものではないかいな。▲釋迦はかぶりふり。中〳〵そのやうな事ではない。此方の善導大師が三尊を吹た時。きつふむつかしい事じやなかつた。紙を玉子にしたり。はなへ釘を入たりするが。合点のゆかぬものじや。とはなしがしめば。老子は大欠。▲瀧は氣をつけ。　是は老子さま。お氣がつきたそふな。あちらに床もとらして置ました。大空さん。つれましておいでなされませ。▲大空　ィヤさつきにから。こちらで日がらの事をいへば。あのやうにあくびして。まぎらかしてござんすわいな。▲瀧　日がらの事は。あちらでしつほりとおやくそくあそばせ。と二人りを奥へすゝめやれば。▲樂天は氣をきかし。　わたくしも勝手に用がございます。皆さま。のちほどお目にかゝりましよ。とかつてのかたへ立てゆく。▲亭主李白　此おさかづき。まづわたくしがあづかりましよ。ととさん持そへ入ん。▲瀧はざしきを取つくろい。　かりの世さま。尺迦さまをちとおくへつれましておこしあそばせ。▲孔子曰　コレ釋迦す。ねはんに入て。寂滅已樂たのしみ給へ。△しやかコレ大みちス。又おやぢが男女席を同じうせずなとゝいふて。ひぞりかけたら。つめつておかしやれと。悪口いふて。次のざしきへ入ん。跡には孔子と大道さしむかい。　なんじやいな。かだくろしい。その羽織もぬぎなんせんか。ちとおやすみなされぬか。△孔子ねるにそばたゝず。ドレ〳〵其まくらおこし給へ。と東枕にね給ふ。△大道　おまへ

はこちらまくらになんすかへ。孔子も東首したまふ。　禿よ。予が手をさすれ足をさすれよ。△太夫　さすれなりやわしがさする。コレおまへに見せるものがある。コレ見さんせ。わたしか心底は此通りでござんす。と肩をぬげば。孔子命といふ入ぼくろ。△孔子　ハテわけもない。身躰髪膚父母に受たり。損ひ破ざるをば孝のはじめといふに。いかに弁しらぬとて。やくたいもない事をしやる。△太夫　なんぼふ孝になつても。おまへゆへなら大事ない。△孔子　イヤ孝弟忠信。其道わきまへざるは人にあらず。と口説のさいちうに。△瀧あはたゞしくはしり出。申。尺加さまのねやより。御手のなるやうにぞんしましたゆへ。さんじたれば。尺迦さまもかりのよさまも見へませぬ。御二人のまくらもとに。こんなものが。と斗といき。△孔子驚き。トレ。△亭主李白。びつくりしてとんで出る。▲老子越中褌ひきずりて出る。▲みな／＼。何事。と書いたものくりかへし／＼見る。ナンシャ是は九重のまもり見るやうな文字ばかり。どふもよめん。いかゞせん。と互に顔を見合。氣をもみあせる。かゝる所へ。△ちやんのはのよな白ィ氣を持ちやんな。黒ィばいたらばの氣を持ちやれ。トンチリチンテンチャンホラホ。すいつく。とりつく。すつてん／＼。いしふし。ゑんれん。きりふくりん。とんな。チリンテトン。しやん／＼よい／＼のよい。おどりさわいで。△阿難文珠△目漣賓頭盧つれたちて來る。　どふじや／＼。李白はうちにか。北のかたはどこにぞ。今夜もぞめきに出たが。道からしゆこうが付た。とどや／＼とわめき立る。△李白たき　是は／＼よい所へ來てくれなんした。しゆこう所じや御ざりませぬ。▲尺迦さんがかりの世さんつれまして。欠落なんした。大ていのとではござりません。皆ちやつと奥へ來ておくれ。▲四人のらかん　これはすさましい。と驚き。ざしきへゆく。▲瀧先此かきをき讀んで見ておくれなされませ。とあなんにわたす。▲あなんよむ。





南無三寶。欠落所でない。死ヲるかくごのこし文二人の辭世。サア大事〳〵。といへば。▲老子はあせ手ぬぐひで。頭からげる。▲ていしゅうろたへ。是はマアなんとせう。▲孔子　なんと所か。サア〳〵文殊とうぞ。是にはよきちゑはないか。文珠〳〵。是はしたり。文珠か見へぬ。もんじゅ〳〵。ィヤ是に居ります。そふあらふとおもふて尺迦子の寐間を見に行しが。まだふとんのぬくさ。片時もはやく手配してをつ手〳〵。たづぬるより外に分別なし。といひつゝ。コレ李白。▲李白　ハィなんでござります。▲もんじゆそのせに十貳文持ておじや。▲李白　かしこまりました。ッノなつよ。小遣せにもつてこい。▲なつ。小遣せに持て來る。▲李白とつて十二文よむ。其間に。▲文珠。ふところよりはなかみ壹枚とり出し。十貳文のせに包み。これ目連。貴樣は神通の名人なり。こんな時の重寶。いそぎ清明の師匠の白道のかたへ行。方角の八卦たのんできたまへ。とわたせは。▲もくれんせに受取て飛ふがごとくにはしり行ク。〔座中みな〳〵よこ手をうつて。



さてもぬからぬ／＼。さすがもんじゆの分別。とてん手に追手の。用意のてうちんこしらへするやら。わらんづのひもすげる内。▲瀧がさいかく。賓頭盧の兩足のふし／＼。こむらおさゆるやら。うへを下へともてかへす。

道行妹背の送り火

さればにや。釋尊はかりのちぎりもかりの世と。ふかきいもせの中となり。くるわをぬけて只ふたり。越路のそらを跡に見て。十万億へと心ざす。道はどこやらあとさきも。涙の雨のはれまなく。ぬれてかわかぬ沖の石。つれ弾にしたその時に。わたしがばちをもちそへて。いとしひぞやといわしやんした。その一ト言がえんのはし。愛別離苦の世のならひ。おふはわかれと口くせに。あじきないことといはしやんす。それでわたしがこのつかへ。天上天下唯一人。おまへならでとおもひつめ。此世はおろか後の世も。かわるまいぞと六道の。ちまたにまよふ戀のやみ。ころしもけふは文月の。中の六日はなき魂を。しやばへむかへておくり火の。おくれさきだつ死出の道。往來の人のしげければ。くさ葉のかげに身をひそめ。立たずみたまふぞいたはしき。かりのよなみだにくれなから。かならずつま子の有人と。すへのやくそくせぬものと。我身のうへに聞くつらさ。やしゆたらさんのさそやさぞ。わたしをうらみてござんしよと。たもとにすがりなきければ。ァ、おろかの人のくりことや。色卽是空ときくときは。自他平等にへだてなく。共に一蓮托生ぞや。アレ／＼アレあれを見や。ぐせいの舟の乘合に。おもひなき身の女夫づれ。二世のちきりのうらやまし。一むらそびへし深山こそ。つたへ聞つる劍の山。地ごくの里はあれかとよ。經かたびらのながゝ袖も。偏袒右肩此まゝに。是ぞ卽身成佛の法のちかひのたのもしく。夫婦は二世のちぎりぞと。手に手を取てゆく程に。三津の川の舟よばひ。女渡得船のさをさして。彼岸にこそ着たまふ。

白樂天船中之澤

壹ッ　つうゃといふ　二ッ　かくゃといふ
三ッ　たつゃといふ　四ッ　ますゃといふ
五ッ　てんゃといふ　六ッ　すいゃといふ
七ッ　しんゃといふ　八ッ　はいゃといふ
九ッ　もうこといふ　十ッ　かんなといふ

三聖廓中之戯言

廓そうじて遊所の事をなんくわんといふ

女郎を　にいくんと云　若衆を　れんつう
娘を　にいつう　女を　にいしん
尼を　にいすゑん　亭主を　じうてい
仲居を　にいとう　引舟を　にいはん
火車を　にいくはん　禿を　ぢよてい
客を　きや　大じんを　くうてき
すいを　そうちん　色を　きん
ぶすいを　ほうちん　うそを　へんな
つとめを　すいこ　ほれたを　ていら
交合を　すてき　のいたを　はん
寐を　すん　おきるを　とう
銀子を　ばんづう　金子を　らんつう
たばこを　ちやうこ　きせるを　すとん
酒を　ちう　肴を　こん
吸物を　しゆせん　盃を　ちうはん
青を　せた　黄を　ぬく
赤を　めんる　白を　ほう
黑を　こう　歌を　かん
三味線を　てんきん　琴を　りきん
こきうを　ちよきん　尺八を　げん
うつくしいを　ほう　好を　れん
わるいを　しう　すかんを　けまな
盃さしたをめんとん　間を　ちよん
おさへを　りやん　助を　ごうてん

此外委は記しがたし有増をといむ

寶暦七年
丑六月吉日
大阪高麗橋筋四軒町
書肆　堺屋市右衛門梓